HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	言語的修復行動に関する語用論的研究 ： 中国語との比較を通して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	張, 玲玲
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11176号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55332
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Zhang_Lingling_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　張　　玲　玲

学位論文題名
言語的修復行動に関する語用論的研究　−中国語との比較を通して−

本学位論文は，日本語を主たる対象言語として，会話中に生じる修復現象を取り上げて多角的に分析を行った研究成果である。一般に会話においては，話し手が言い間違えたり，適切な表現を選べなかったりするだけでなく，聞き手が相手の発話の全体あるいは一部を聞き取ることに失敗したり，聞き違って誤解したり，十分で正確な解釈を引き出すのに必要な知識を持っていなかったりするなど，会話の理想的な進行という観点から見たときに問題になる事象が生じる。また，会話参加者間で有する知識の量や質に明確な差があるときに情報や知識の提供を一方的に行なうこと，相手の考えや提案を理解しないことや受容しないこと，相手の所説や信念に反論をすることは，それ自体が問題となるだけでなく，相手や自分の面子(フェイス)を侵害するという派生的なトラブルともなりうる。本論文では，この種の問題やトラブルを解決したり，回避したりするための行動を「修復」という観点で広く捉えている。

従来，この種のテーマは会話分析という領域で主に扱われてきたが，本論文は会話分析の知見を基盤とするだけでなく，語用論的知見を利用して，多層的に分析する手順を踏んでいる分析手法が特筆すべき新機軸になっていると言える。特に，「修復」の実態を捉え直すほかに，いかに行き違いや失行を抑制し，予防するか，そのための方策がどのように準備されているかなどを文脈論の知見を援用して明らかにしており，従来の会話分析の枠組みで捉えきれなかった論点を新たに取り上げている。加えて，会話参加者間の見解の相違やそれと連関するフェイスバランスのくずれを分析し，修復現象を複層的で広汎なものとして位置づけ，日本語話者の会話構成のあり方を中国語話者と比較する対照言語学的研究に進めている点は重要な成果である。

以下に，本論文の構成と各章の概要を簡略に述べる。本論文は三部 9 章で構成されており，第 1 章から第 3 章までが第Ⅰ部，第 4 章から第 6 章までが第Ⅱ部，第 7 章以降が第Ⅲ部で，第 9 章が全体のまとめと問題点の整理に当てられており，巻末に 4 種の参考資料が付されている。第Ⅰ部は，第 1 章「研究目的と論文構成」で論文の構成と研究目標・対象を記したのち，第 2 章「先行研究の検討と方法論的枠組み」で先行研究を概括し，本論文での研究の方法論を論じた上で，具体例を使って修復の類型を整理している。第 3 章「調整との関係に着目した修復の機能」では，「修復」を拡張的に捉える中で「調整」行為を切り離して相違点を示し，調整を２類型に大別している。また，伝達のプロセスを産出・理解・受容の３段階に分け，各段階における修復と調整のあり方を整理している。

修復の類型は，話者・聴者のいずれが開始するか，修復の実質をいずれが行うかにより，形式上４類型に分けるのがシェグロフらの研究以降一般に行われていることから，本論文でも会話分析の手法としてこれを用いている。この類型は日本語会話の分析にも適用可能であることを確認し，実際の会話データの分析を示すとともにまず例示している。以上が，第 2 章までの予備的議論である。第 3 章では，不首尾が生じたあとの回復措置としての「修復」以外に，不首尾が生じる前にそれを予測して回避する「調整」の概念を提案し，修復との相補的なものとして位置づけ，調整を情報伝達上の調整と対人関係上の調整に区分することを主張している。この点はより精密な分析を行う必要があるが，着眼点としては独自性と一定の合理性があると認められる。

第Ⅱ部では，まず第 4 章「理解上のトラブルに対処する修復・調整」で，理解に関わるトラブルを不理解と誤解に分け，さらに，それらを回避しようとする調整と既に生じたトラブルを解決する修復とに分けて，個々の事例の原因に着目して細かに記述し，分析を行うことで，修復と調整のメカニズムを明らかにしている。第 5 章「受容上のトラブルとしての不同意について」では，

会話参加者間の不一致を抑制する調整行為，不一致を回復するための修復行為を分析し，第 6 章「受容上のトラブルとしてのフェイスバランス」で不一致によるフェイスバランスを保持するための調整と修復を非均衡に着目して論じている。

第 4 章では，受容より前に理解に問題が生じるケースを取り上げて細かに分析し，理解に関わるトラブルを「誤解」と「不理解」に分けることを提案している。それぞれに対する修復と，それぞれに関わる調整に理論上分けて，それらの修復・調整が見られる会話データを個別に分析している。また，会話の中では，話者と聴者の間で意見や見解が相違して，不一致が顕在化することは一般に見られることであるが，第 5 章では，この「不一致」を取り上げて，不一致を回避したり，不一致の顕在化を抑制したりするための調整行動をまず分析している。また，不一致が顕在化したときにこれを修復する行動を，不一致の原因ごとに分類してつぶさに分析している。第 6 章では，会話参与者の一方のみが賞賛されている状況などフェイスバランスが偏りを生じている不均衡状態についてより均衡したフェイスバランスになるように修復する事例を分析している。これはリーチの原則にもある他者賞賛の最大化・自己賞賛の最小化をバランスという観点から発展的に捉えなおしたもので，今後，より精密に理論化させていく余地を残しているが，日本語の会話組織の特性の点でも注目すべき成果である。

第Ⅲ部は，前章までの結果を踏まえた日中対照研究である。第 7 章「修復の開始形式についての日中対照」では，自己開始修復（SISR / SIOR)が先行研究で非秩序的とされてきたことと合致しない傾向が日本語に見られ，中国語でも自己開始修復に秩序性が見られること，この種の修復の違いは，言語の違いよりもトラブルの原因の性質の違いが大きく作用していると考えられることを報告している。確定的な結論を得るには，もっと事例研究を増やす必要があるが，少なくとも従来の考え方よりも精密でより進んだ見解であり，今後より研究を深めて成果とすることが期待される。第 8 章「修復方策に関する日中対照」では，修復実行方策のうち，同一ターンにおける自己開始・自己修復方策と他者開始・自己修復方策について日本語会話と中国語会話の間で比較対照を行っている。結果的に，細かい差異はあるものの，同一ターンにおける自己開始・自己修復方策では，いずれも下位類型 4 種に収束し，他者開始・自己修復方策では，ともに 5 種類の下位類型に収束し，おおまかな傾向と見るべき程度には共通性が見られることが確認された。

第 9 章「全体のまとめと今後の課題」では，本論文での成果をまとめたのちに，十分な解決といえない点を整理し，今後分析を発展させる余地のある課題として提示している。

本論文の作成に先立って，データを取るために作成された日本語会話データと中国語会話データが参考資料として添付されている。特に前者は既存のデータを使う以外に，今回新たに会話収録の設計・文字化とトランスクリプションの規則化など，著者自ら作成したもので，今後の再検証に使用可能なだけでなく，今後同様の研究を行う者にも基礎データとして供されている。